

当事者の語り合いから見る東日本大震災における被災の多様性と多層性  
——ライト被災/グレー被災体験とはいかなるものか——

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
臨床心理学領域  
伊藤 美樹

本研究は、東日本大震災において津波や原発に影響を直接受けていない内陸部の人々の被災体験をもとに、その中で一体どのようなことを経験してきたのかをその体験に対する思いや語りそのものから積極的に描き出してみることを目的とした。

震災後の生活を共有していた筆者の知人グループの中から参加者を三名の協力のもと、震災を経験した当事者でもある筆者と協力者との語り合い法によるインタビューを行った。

エピソード分析の結果、被災感が薄く、自分たちは被災していない、という語りから自分たちの被災を自覚していくという語りの変化が見られ、続けて自分たちの立ち位置を“被災していないわけではないけど被災者ではないというライト被災/グレー被災”を経験した者と位置付けていくようになった。次に、語りの変化として出てきた被災感の薄さ、被災の自覚、ライト被災/グレー被災という独自の感覚について考察を行った。被災感の薄さにはメディアからの影響、正常性バイアス、被災地にいるからこそ分かる被災の多様性が絡んでいる可能性が示唆され、被災の自覚では自分たちの被災体験を何もなかった地域と比べ、グループで語ることで体験に対する感覚の変化が生まれたのではないかと考えられた。続いて、ライト被災/グレー被災という言葉は語り合いの中で参加者たちは自分たちの体験も被災に値すると自覚できたが、一方でより被災の多様性・多層性に気付いたからこそ、自分たちの体験を簡単に被災・被災者とは言い切れないのかもしれないという両方の気づきを含めた言葉として出現した感覚なのではないかと考えられた。